

《紹介》

クリスチャン・ダニエルス
渡部 武編

『雲南の生活と技術』

田中耕司*

中国の開放政策以来、雲南訪問記や雲南での調査報告をまとめた書物が出版されるようになってきた。その多くは、照葉樹林文化論や稲作文化論の立場からわが国の民俗文化や農耕文化の源郷を訪ねるといった視点で書かれている。そんななかにあつて、本書は雲南に居住する諸民族の生活や生業をまず紹介することに主眼をおいた書物として出版された。むしろ、意図して照葉樹林文化や稲作文化の系譜論を避けたかと思えるほど、雲南そのものに徹したところが、本書が他の雲南関係の書物と大きく一線を画しているところである。

編者はともに中国史を専攻する歴史学者で、そのひとりクリスチャン・ダニエルス氏は中国の科学技術史を、もうひとり渡部武氏は農業史や文化史を専門としている。両氏ともに、漢籍の解釈を中心にした伝統的な東洋史学の研究手法ではなく、史料調査と現地調査の両面から歴史を再構成する手法を早くから実践してこられた。その意味では、東洋史学のなかでやや異色な研究者である。中国での調査や中国人研究者との交流を長年続けておられ、こうした実績が本書のもととなった雲南での調査を可能にしたようである。

調査は、日本側からこの歴史学者2名と民俗学者3名が、中国側からは雲南省民族博物館設立準備室（当時）の研究者が参加して、雲南省南部の西双版纳傣族自治州と西部の大理周辺で行われた。共同調査の期間は1992年12月初めから同月末までの1か月であるが、このわずか1か月の期間の調査から本文460ページ余りにおよぶ調査報告が生まれたことをまず特記する必要がある。調査の準備段階から、そして調査中や調査後に至るまでかなり周到な計画のもとに調査が実施されたことがうかがえる。共同研究者の緊密なチームワークなしではこれだけの調査報告をまとめるのは到底不可能であつたにちがいない。

その調査報告となった本書は、日本側研究者5名と中国側研究者2名の報告計7編、および調査メンバーによる座談会記録1編からなる全8章の構成となっている。そして各章のあいだに、運搬用具・鍛冶屋・竹の用具・狩猟漁撈具・編み袋・諸職・大理白族の甲馬紙など7つのテーマで「民具抄録」と題するコラムが、豊富な写真とともに挿入されている。全8章の標題および著者は以下のようである。

- 第1章 西双版纳少数民族の村寨を歩く
（田村善次郎）
- 第2章 雲南地方伝統生産工具採訪手記
（渡部武）
- 第3章 西双版纳傣族の水車（C・ダニエルス）
- 第4章 雲南の漁と船（神野善治）
- 第5章 雲南の生活空間と食文化（印南敏秀）

*たなか こうじ、京都大学東南アジア研究センター

- 第6章 雲南少数民族の民家の伝統と変化（李銳）
- 第7章 西双版纳山地民族の婚姻習俗と年中行事聞書き（李曉斌）
- 第8章 座談会：西双版纳地方少数民族の焼畑をめぐる（渡部・田村・尹紹亭・ダニエルス・印南）

以上の本文に、雲南省民族博物館準備室の高宗裕氏による「はじめに」、そして末尾に調査行程を詳細に示した「行動日程」とダニエルス氏による「あとがき」が加わって、本書の全体が構成されている。

各章の標題からもうかがえるように、本書は雲南省の傣族ほかの少数民族の生活と物質文化の様子を詳しく記録したものである。豊富な写真と著者らによるスケッチが挿入されて、さながら著者らとともに、雲南の少数民族の村々を一緒に見ているかのような臨場感ある内容になっているのが本書の大きな魅力である。読むうちに、まるで、著者のフィールドノートのまとめをのぞき見させてもらっているかのような印象を受ける各章の内容は、雲南の少数民族の現在の生活とそれを支える物質文化の実態を記録する第一級の資料といえよう。

フィールド調査のなかでフィールドノートをどうとるか、そして調査現場でとったそのノートをどう整理するかは、調査研究に従事する研究者一人ひとりにそれぞれのスタイルややり方があるものである。本書の各章を読むと、各著者の調査のし方、記録のとり方、あるいは整理のし方がうかがえて、フィールド調査法という面でも、本書の内容は示唆するところが多い。

各章の多くは、著者のこうしたフィールドワークの記録としてまとめられているの

で、本書を読むにあたっては、読者の興味に従って、どの章から始めてもさしつかえない。ただ、上記の調査期間中、著者たちが同じ調査村を合同で調査しているの、この1か月の調査日程と調査地をあらかじめ把握しておくのが、内容をより深く理解するのに便利かと思う。評者は、本書をはじめから終わりまでページを追って通読してみたけれども、まず巻末の「行動日程」と調査を総括している「あとがき」を読み、続いて、この行動日程どおりに調査の全容を日記風に詳しくまとめている渡部執筆の第2章を読まれることをお勧めしたい。こうすれば、調査の全体像がまず頭に入って、本書における各章の位置づけがはっきりとつかめるのではないかと思う。

次に、本書の内容を簡単に紹介しておこう。編者のひとりダニエルス氏が、漢化が進む雲南の「均衡のとれた歴史的認識を得るためには、何よりもまず、少数民族側の論理を明確にする必要がある」と「あとがき」で述べているように、雲南の歴史理解のためにまずそこに住む人たちの「生活と文化という原点」を探ることが、この調査の基本的なねらいであった。そしてさらに、従来、雲南省や貴州省の中国西南部が日本文化との関連で取りあげられてきたことに言及しつつも、むしろ「本書の目的はできるだけ生に近い形で、調査資料を研究者に提供するところにある」とも述べているように、将来の研究展開に向けた「基礎資料の充実」とその共有を目的として、本書が編まれている。

こうした目的にそって、調査中に訪れた各民族（傣族、^{ハニ}哈尼族、^{ラカ}拉祜族、^{クム}克木人、^{ジン}基諾族、白族）の村々の景観、生業（特に

農業と漁業)、生活用具・生活空間・食生活などの丹念な記録が紹介されている。どの報告も現状をもらさず記録するという姿勢で貫かれており、したがって、各民族の生活文化に見られる伝統的な民族固有の側面と漢化の影響を受けて変化しつつある側面の両方があるがまさに紹介されて、歴史の動態のなかで変容しつつある各民族の生活実態がつぶさにうかがえるのが、本書の最大の利点である。

雲南では各民族が例えば居住地の高度によってすみわけており、少数民族の伝統的な世界はこのすみわけによって独自の生活様式と共生のシステムを作ってきた。ところが、こうしたシステムが時代とともに変容していくことは、雲南のみならずどの地域の少数民族の世界でも起こっている。こうした実態を歴史的に受けとめて、むしろその変容のなかに民族固有の異文化受容の実態をうかがおうとする成果が、体系的な記述ではないにせよ、本書の各所に散見される。歴史学者と民俗学者の共同調査によってはじめて可能となるような事実が本書のなかに多く見られるのである。

例えば、戦前の^{マーバン}馬幫・^{ニェウバン}牛幫と呼ばれたキャラバン商人たちの交易にはじまり、鍛冶屋や銀細工師の伝統的な出稼ぎ、あるいは近年盛んになっている少数民族居住地域への漢族の移住や出稼ぎなど、雲南を舞台に展開する民族交流と人々の移動ネットワークの記載(第1、2、5章など)は、少数民族のおかれている実態が如実に現れた部分といえよう。雲南とそれに隣接するミャンマーやラオス、そして中国の各省との人とモノの流れは、歴史的にも少数民族の生活に大きな影響を与えてきたが、近年

は、そうした人とモノの交流・流通がさらに活発になっている。とくに漢族の省外や国外への出稼ぎが活発化し、その流れの多くは雲南の少数民族居住地域を經由しており、人とモノの交流を見るうえで雲南地方は非常に興味ある地域となっている。本書は、人々のそんな動きを少数民族の村のレベルから伝える貴重な情報を提供している。

少数民族の物質文化の面では、漢化による住居や食事の変化とその変化にみられる民族間差異などの記録(第5章)が、少数民族の文化変容というどの地域にも共通する大きなテーマを考えていくうえで、貴重な一次資料を提供している。例えば、雲南の少数民族の場合、従来からモチ米を主食としていたグループのほかに、おもにウルチ米を主食とし祭などの機会に餅をつくというようなグループも混在しているが、漢化のなかで、ウルチ米の食習慣が拡大しつつあり、その変化が、副食の食素材や調理法・調理具にまで影響が及んでいる。また、従来の高床式住居から土間式への変化、あるいは建材の変化なども詳しく観察されて、文化要素の変容についてさまざまな角度から興味深い変化が報告されている。

生業についての報告にも興味深い問題が数多く提示されている。まず焼畑農業について、とくに西双版纳の少数民族の焼畑の観察事例がいくつかの報告(第1、2章)に示されるが、こうした観察事例を総括するかたちで、最終章の座談会で焼畑をめぐる議論が展開される。座談会では、雲南の焼畑耕作を長年調査してきた尹紹亭氏が少数民族の焼畑農業を典型的に整理したうえで、1983年のいわゆる「林業三定」とよばれる林地に関する新しい土地政策の導入が

伝統的な焼畑システムを大きく変化させたことを紹介しており、雲南の現在の焼畑耕作を理解するうえでの基本点が指摘されている。政策的な変化が土地利用や農業形態に大きな変容を迫ったことは想像にかたくないが、ただ今回の調査では、その変化の過程を村レベルで詳しく追えなかったようなのがいささか心残りである。調査期間の制約上やむをえないことではあったが、将来、こうした生業の変化が詳しく調査されることを期待したい。

生業に関して、もう一つ大きくとりあげられているのが内水面漁業である。雲南にとどまらず、東南アジアも含めてとくにタイ系諸族のあいだでは河川、湖沼、水田等での内水面漁業が発達している。こうした漁撈活動に関するとくに漁具の面からの調査結果が第4章にまとめられている。僚族が居住する西双版纳地方を著者が訪れていないので、第4章はおもに大理地方洱海周辺の白族の事例が紹介されているが、この白族の報告だけを見ても、雲南から東南アジア大陸部に連なる地域の内水面漁業の重要性がよくうかがえる。また、この章で紹介されている白族の鵜飼いによる漁業は、東南アジアから東アジアにかけて広がる鵜飼いの比較研究資料としても貴重な観察記録といえよう。

農業に関わる用具の観察も丹念に行われている。第2章の耕作用具、第3章の水車についての報告がそれである。第2章の著者渡部氏はこの調査をもとに、本書とは別に『雲南少数民族伝統生産工具図録』という農具図録をまとめられたという。分量が多く本書には収録できなかったといういきさつが「あとがき」にあるが、1か月の調

査で、豊富な写真資料に加えてさらに図録までまとめておられるわけで、調査がいかに集中的に行われたかがこのこのことからよくうかがえる。また、ダニエルス氏の水車の報告では、水車を探すのに随分苦労された様子が本文からうかがえる。伝統的な生産用具は、生業の変化や生産様式の変化にともなって捨て去られたり、他の用具に代替されていくので、こうした用具類の丹念な記録が貴重な資料として残ることになる。この第2、3章だけでなく、本書の各章がそんな意味でもすでに貴重な資料集となっているといえよう。

読後、こんな調査もしてほしかった、あるいはこんな議論も展開してほしかった、という注文がないわけではない。例えば、水田耕作や土地利用の実態についての調査があれば、少数民族の世界の全体像がさらに詳細に描かれたのではないかと思う。また、調査が行われた西双版纳地方と大理地方との比較の視点にたった議論などが展開されれば、雲南の少数民族の世界がもっと重層的に紹介されたのではないかとも思う。

しかし、わずか1か月の調査期間で何もかもを調査するのは不可能である。将来、こうした問題も含めて著者らによってさらに調査が進展することを期待したい。ただ、繰り返しになるが、このわずかな調査期間でこれだけ重厚な調査報告がまとめられる例がそうあるわけではないことを、もう一度強調しておきたい。そんな意味でも、雲南に興味をもつ人だけでなく、野外調査を行おうとする人にも本書をぜひ参考にされることをお勧めしたい。大いに得るところがあるにちがいない。

(1994年、慶友社、10.094円)